

情報世紀への選択

NHKエンタープライズ編

日本放送出版協会 B6判 二五四頁 一、四〇〇円

この本は昨年四月、NEC日本電気グループとNHKエンタープライズの共催でひらかれたワールドシンポジウムの討論を軸に、これを補足するかたちで情報化の進展度を多角的に紹介している。

21世紀を目前にした近年、デ

タントの促進、EC統合、経済活動のボーダーレス化等、世界の枠組みが大きく変わりつつあり、正直言って少々消化不良を起しかかっているというのが実感である。しかし、ここではそのような気の弱いことを言うことなく、こうした情勢の変動の背景を、世界の人々が情報を共有し合うようになってきていることにあると積極的にとらえ

中「21世紀は教育の世紀」

○アルベール・ブレッツァン(仏)、プロメテ研究所長——工業社会が「システム」なら21世紀はこれらを取り結ぶ「ネットワーク」

○ダニエル・ベル(米)、ハーバード大学教授——21世紀の課題は情報の判断・評価をすべき「知識」をどう増やすか、である。

○フレッド・バーグステン(米)、国際経済研究所長——「グローバル化」

○堺屋太一(日本)、作家——知恵の値打ちが経済の成長と資本蓄積の源泉となる「知働社会」

○中沢新一(日本)、文化人類学者——コンピュータのハード側面の発達がむしろ「人間が生命体である」ことを明確にさせる。

○大前研一(日本)、マッキンゼー&カンパニー・インク・ジャパン会長——「国」を越えた政治、経済の再編という「新しい秩序づくりに向けての苦悩の時代」

討論は、企業行動、新しい文

ス会社の興隆ぶりや国際電子学生会議、はたまたハイテク遊牧民なる新しい仕事のあり方など情報化社会の最先端の事例が紹介されている。

内容はもし興味があればご一読していただくとして、討論のなかで気になった点を二つほど。

一つは、主として大前氏の主張として語られている。「企業のグローバル化を国家、ナショナルリズムが阻害しており、消費者としての市民の利益を損なっている」との考えである。

C&C(コンピュータとコミュニケーションの融合)は、確かに市場経済原則を国境を越えてより純粋に貫くことを容易とさせ、モノ、カネのチームでは市民に利するところ大であろう。

しかし人は消費者としてのみ生きるにあらず。モノを消費しながらある一定の生活圏域の中で暮らしていく生活者であるというトータルな存在である。その意味では、福祉、保健、医療といった社会的サービスや、道路、下水等、公共施設整備など市民の生活のサポートシステムを担う地方自治体としては、このグ

ローバル化の動きを「生活者」の視点でどうとらえ、地域経済等とどう調整していくか、など新しい対応がもとめられてきていることをヒシと感じさせられる。

もう一つは、子どもの教育。コンピュータ化社会は新しい考えや精神の形成のプロセスにどのような影響を与えるのか、という中沢氏の問いである。

情報化をはじめとして、国際化やサービス経済化、あふれるモノ、etc。今日の子どもらは、具体的な体験や実感のないままに狭義の知識、情報に囲まれているのではないかと危惧を覚えるのだが…。

情報を強力な武器に世界を股にかけて飛び回る人もいれば、片やめぐるしい変化に適応できない情報弱者も大量に生み出されつつもある。情報化の流れが必然であるとしてもそれをヒューマン・スケールに制御しうる、ベル氏の言うがごとく、知識・知恵がますます求められるようになってきているのだろうか。

〈民生局 芳賀宏江〉